福島と「人」でつながる
関係人口のデザイン

晃華学園中学校高等学校　Ｆ：NeXt

1.私たちのこれまでの活動

自主ツアーの実施

販売活動

出張授業

晃華学園中学校高等学校では４年前から、他校と協働して
「震災を知らない世代」として“福島を伝える”活動を継続してきた

2.福島の「伝え方」を変える

その活動の中で若い世代は震災を知らず、
“自分ごと化”しにくいことに気づいた。
⇒しかし復興、特に県外最終処分の問題に
直面するのは、まさにその世代。

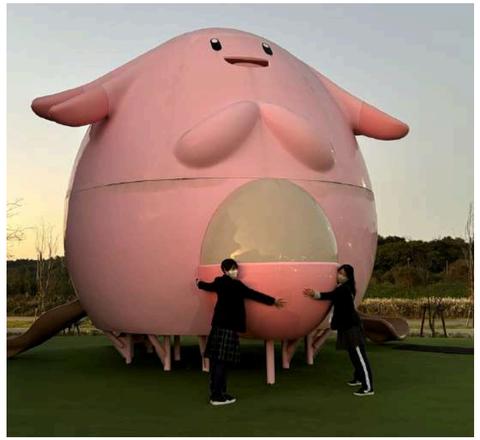
≪私たちの結論≫
だからこそ「震災を伝える」から
「共に考える」への転換が必要。
☆「首都圏の中高生がともに考えるハブになる」☆

3.変化・進化の方向性

【私たちが活動の中で気づいたこと】
私たちは、福島に行くだけでは縁を感じない。
福島で出会った“人”との関係こそが、つながりの起点。

「土地ではなく、人に縁を感じる」

関係人口を考える上で大事なのは、
場所ではなく「人の縁」のデザイン。



4.Action①自主公演会の開催

誰かを待つのではなく
自分達で機会を作る

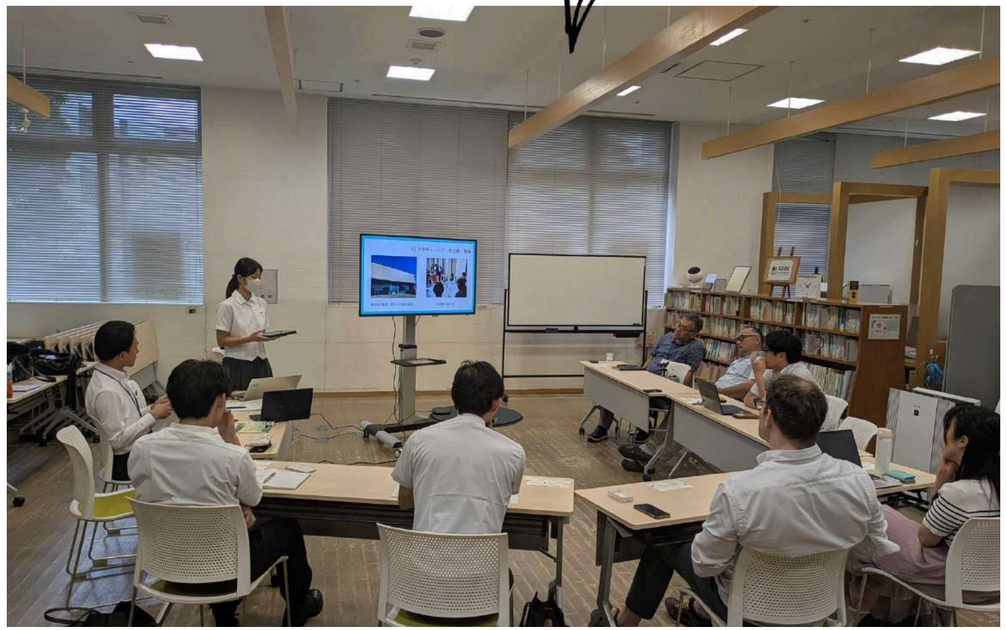
昨年度のチャレンジアワードで
提案した、中高生が主体となる
「福島の現在に関する講演会」を実施。
環境省職員の方をゲストに招き、
100名の聴衆を前に、中学生：司会、
パネリスト：高校生で開催した。

「行政と市民の間をつなぐ“橋”」となる構造を
中高生が自らで作った。

5.Action②教員勉強会の実施

これからの中高生は
大人とともに学びを
デザインする

「福島の今を知ってもらう」ことの
教育的価値を伝えるため、先生などの
教育関係者向け勉強会を高校生が主催。
環境省職員の方をゲストに招き、大人達
に福島への関心を持ってもらうことで、
次世代への波及を目指した。

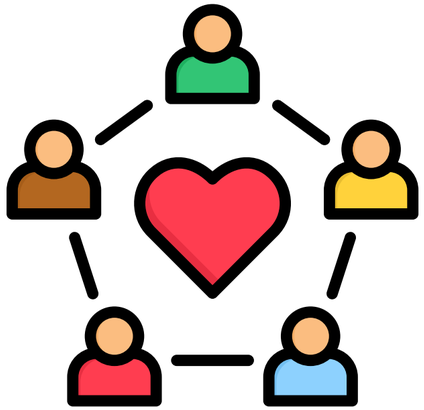


中高生自らが“伝える側を動かす”立場へ。
※高校生→教員→他校や次世代の生徒

6.次世代が作る“繋がりのインフラ”

【「一度の出会い」で終わらせない大切さ。】

関わった人が、次のハブになることで“関係の循環”、「繋がりが繋がりを生む仕組み」が作られる。若い世代は震災を体験していないからこそ、新しい繋がりの形を設計する役割がある。



【繋がりのインフラ】

これまでの場作りで福島を起点とした“繋がりのインフラ”が動き始めた。これが広がれば、福島への共感と行動が連鎖する。私達は、全国の人が自然と福島に繋がれる社会を目指したい。

7.福島から、日本の未来の学び方を変える

中高生主体の対話の場は、学校では学べない「人との縁」「社会との繋がり」を生み出した。福島での実践は、未来の教育がどうあるべきかという問いにも答えている。すなわち**一方的に学ぶのではなく、当事者と繋がりながら、社会を変えていく**学び。私達は福島を入口に、「人を中心にした学びの変革」まで視野に入れて活動を広げていきたい。